

本校福祉科の生徒の活動が、南日本新聞に掲載されましたので紹介します。

さつま町は、地元の薩摩中央高校福祉科の生徒と連携して、障害者の福祉事業所や支援団体を紹介する冊子作りを進めている。働き手の確保や福祉現場に

ついで理解促進に向けて、若者視点を反映させた内容にしようとして初めて企画。生徒たちは本年度中の完成を目指して、事業所への取材などに励んでいる。

「現場を知って」冊子作り



スタッフの説明を受けながら施設内を見学する薩摩中央高校生
＝さつま町の宮之城ふくし園

薩摩中央高生

冊子では、町内に14ある事業所のほか、同校福祉科

若者視点で福祉紹介

を含めた町内外の6団体を取り上げる。町が500部作成し、町内の小中学校や公共施設、福祉系学科がある県内の高校に配布する。作成に協力するのは福祉科1～3年生の全生徒35人。12日には1、2年生26人が宮之城ふくし園や支援センターさつまを見学し、スタッフに仕事の内容や魅力について尋ねた。生徒たちは今後、各事業所のお薦めポイントなどをまとめ、冊子の名称や構成も考える。

2年の下松八重宗馬さんは「バリアフリー化の取り組みなど現場を知る機会にもなった。福祉への関心を高められるような冊子を作りたい」。保健福祉課の久徳竜也主査(46)は「少子化が進む中、人材確保は大きな課題。地元事業所への生徒たちの就職率向上、薩摩中央高校福祉科への入学者増にもつなげたい」と話している。(右田雄二)